

# 都市文化の価値の再認識とさらなる活用

## 大阪の現状から

関西には豊饒な歴史や文化があり、各地域でまったく個性が異なるのが特徴である。京都は、はんなりとした上品なイメージで、神社仏閣、まちなみ、食べ物など、歴史がそのまま今に伝えられおり、住民はわがまちに誇りを持つ。京都に本社を置く企業はそのブランド力を支えにし、国内外の観光客にも大変評判がいい。神戸は、ハイカラな港町としてシャレたイメージで、風見鶏に象徴されるような異人館やパン屋をはじめ、山の手の高級エリアに住む、あるいは通学することに憧れる人も少なくない。

一方、大阪である。ビジネスや買い物に非常に便利なまちだが、文化的な側面でのイメージは、コテコテ、お笑い、コナモン、阪神ターゲースなど偏りがあり、さらに、駐車違反

やひつたくりが多い怖いまちなど、良くないイメージが誇張されている。大阪人自身が自虐的な表現をすることで、ウケを狙う傾向があるのもその一因なのかもしれない。

実際、ビジネス客や観光客は、大阪城、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン、道頓堀、新世界などのお決まりのポイントを訪ねると京都や神戸へ半日観光に出向いてしまう傾向が強い。旅行会社も、従来からの偏ったイメージを助長するような広告やツアープログラムを提供しているのが現実である。

タコヤキやお好み焼き、吉本新喜劇、グリコのネオン街はひとつの大坂の特徴であり、確かに人をひきつけるパワーがある。しかし実際に大阪には、それ以上に、難波宮からはじまる長い歴史や、時代に伴い育まれた多彩な文化がある。お笑いという括りであれば、上方落語も松竹新喜劇（人情喜劇）というジャンルもあり、食文化では、昆布・だし文化に、他都市に勝るものがある。今なお残る伝統的

な町家や近代建築、さらに新たに芽生えつつあるまちづくり活動やアート、サブカルチャーなど、多種多様な側面があり、ひと言ふた言では表現できない深い魅力をたたえている。にもかかわらず、周知されていない。

都市の力を考える時、木津川計氏は「経済の視座」と「文化の視座」があるという。それらの視座から改めて振り返ると、大阪の場合、商人のまちであつたことも手伝い、都市の力を何よりも経済的な観点から捉える傾向にあつた。まずもつて、経済的基盤がなければ、文化も成立しない。住民が今日明日の暮らしを営むためには当然の考え方である。しかし、あまりに目先の利益を追い求めれば、文化も成立しない。住民が今日明日の暮らしを営むためには、文化的な思考が欠落していったのは確かである。例えば、家屋の焼け屑を、歴史的に有名な川に埋めて堀をなくしてしまったり、まちの歴史が表現された町の名前を合理的な名称に変えてしまったりと、まちの記憶を根こそぎ



栗本 智代

Written by Tomoyo Kurimoto

大阪ガス(株)エネルギー・  
文化研究所 研究員

絶やす作業があちこちで行われてきた。文化を軽視した結果、まちの魅力が減少していくことが、経済力にも影響を与えたのだろう、現在は、大企業の本社が、東京をはじめとする他都市に流出し、府民所得や工業生産高も下降しつつある。

都市の経済力の低落については、数字として明らかになり、わかりやすいため、まだ地元住民には認識がある。が、都市の文化力については、かなり認識不足である。地域が記憶を失いつつあること自体あまり問題視されず、十分な文化政策が取り組まれてこなかつた。いや、担当者は頑張って取り組んでいたのであろうが、十分な成果に結びつかず、また住民も、地域資源への関心が希薄である。それ以前に、大阪の歴史や文化、物語があまりに知られていない、という現状がある。

## ● 大阪は豊饒な宝の持ち腐れ

ひと昔前の大坂は、まさに文化都市であつた。例えば、ミナミについて言うと、道頓堀界隈は、江戸期から大小の芝居小屋と茶屋が並ぶ劇場街として賑わい、人形浄瑠璃や歌舞伎が上演され、大阪らしい趣のある盛り場であつた。隣接する心斎橋筋は、近代モダニズム時代を代表する先端的な文化を発信するおしゃれなストリートで、まさに大阪人が誇るべき商業文化ゾーンであつた。現在は、当時

の空気がほとんど感じられないほどの変貌ぶりで、あまりに失われたものが多く嘆かわしい。都市格ならぬ、エリア格が低落してしまったケースである。

一方、例えば、上町台地の夕陽丘界隈であれば、緑あふれる歴史の散歩道に神社仏閣が



ミナミ：昭和初期のモダンな心斎橋筋

今もなお残っている。実際に歩くと非常に心地いいのだが、その場所や寺社にちなんだ物語やエピソードについて、情報ソフトや発信力が不足しており、界隈の魅力があまり伝わっていない。この地域に根付いてきた夕陽信仰、七坂と呼ばれる坂道の美しさ、芸能の舞台としての寺社、境内など、深く知れば知るほど、味わいが楽しめるエリアである。

また、近代建築についても、貴重なものがあちこちに点在して残存しているのだが、その価値に気づかず、通り過ぎている人が非常に多い。逆に、空堀界隈のように、改修した長屋で新しい店舗が展開され、ファッション誌やテレビ番組で取り上げられると、認知度が上がっている例もあるが、その魅力が表面的にだけ捉えられている可能性もある。

このように、豊饒な歴史的文化的な宝物がありながら、うまく活用できず、持ち腐れているのが、現在の大坂であり、大変もつたない状況である。

まずは、その魅力・ポテンシャルを発掘し、伝え、広め、活用すべきである。そうすれば、住民は、わがまちに興味を持ち、各地へ足を運んだり、イベントに参加した



歴史の散歩道としても愛されている「口縄坂」

以上のような問題意識のもと、大阪の持つ資源、まちの歴史・文化や物語・エピソードを、多くの人に知つてもらいたいと考え、進めている研究・発信活動をここで紹介する。現まず、「なにわの語りべ活動」について。現

## なにわの語りべ活動

### 課題解決のための 研究・発信活動

「大阪の都市魅力の発掘・再編・発信」



なにわの語りべ公演より  
楽しくわかりやすいものを目指し、語りと音楽のコラボレーションで、演出に工夫を凝らす



なにわの語りべ公演「大阪モダニズムものがたり」より  
モダニズムファッションショーの模様

在は講演・公演による発信形態が主であるが、大阪のまちの歩みやエピソードを物語として、わかりやすく楽しく伝え、まちに興味を持つもらう契機づくり、まちの伝承力向上を目指すものである。

歴史・文化と聞くと、とつつきにくいイメージを持つ人が少なくないと考え、誰もが親しみやすいように工夫して進めていることが大きな特徴である。

基本形は、解説（語り）と映像。古書や郷土史に埋もれている古い、懐かしい写真や

イラストなどによるスライドショーフormをとり、通常では読み解きにくい資料の見方や、まちに埋もれている歴史や物語などを紹介する。過去だけでなく、現在や未来の可能性についても考える視点をあえて盛り込んでいる。

さらに機会が許せば、音楽の生演奏をはじえて、照明や演出を工夫して、五感で楽しめるようになっている。音楽も、単なるバックミュージックとしてではなく、物語の時代背景や登場人物の喜怒哀樂を反映させたもの

のとして、内容がより効果的に伝わるように、また語りとタイミングがぴったりあうよう、音楽の専門家に音楽監督として書き下ろしてつくつてもらっている。さらに演出に工夫を凝らすこともあり、例えば、昭和初期のモダニズムの時代がテーマであれば、当時のファッショントーンを再現したものを出演者全員で装って、ファッショントーンの中の時間を設けたり、あるいは、「曾根崎心中」のように文楽でも上演されている作品を紹介する時には、女性がひとりで人形を操る伝統芸能「乙女文楽」の人形遣いの方に、遊女の心意気を踊りで表現してもらったりした。淀川の治水翁・大橋房太郎のエピソードを紹介する際には、ヴァイオリニストに俳優に徹してもらい、台詞劇形式で、房太郎の活動や感情を表現したりと、演出のバリエーションを増やしてきた。

音楽をまじえた公演の場合、語りと音楽効果をあわせた作品として発表する。これまでの作品内容は以下の通りである。

「曾根崎心中考」「大阪モダニズム物語」「水都大阪——中之島ものがたり」「夫婦善哉考——織田作之助の世界」「鳴呼、道頓堀・心斎橋」「淀川ものがたり——治水翁 大橋房太郎」「梅田は西からやつてきた——ターミナル開発物語」

## フィールドワーク（まち歩き）による執筆活動

活動の目的は、住民やビジターが、まちを実際に探訪、体験することにより、地域

番外編もある。2009年5月に国立大学法人奈良女子大学講堂で開催された、「奈良女子大学創立100周年を祝う会」で披露した「奈良女子大学ものがたり」である。私が卒業生ということで同大学に依頼され、従来の手法を活用して、奈良女子大学の歴史や、卒業生で画家として有名な小倉遊亀の生き方や作品をもとに、メッセージ性の高い物語をつくつたものである。現在は、大阪の資源を題材に、語りべ公演を行っているが、語りとシナリオ、映像、効果を組み合わせる手法は、「奈良女子大学ものがたり」の例で見られるように、どのフィールドでも活用できるものである。

今後の活動計画としては、まず、さらに多くのまち物語を発掘し、広く伝えていくこと、次に、都市魅力の再発掘、発信ワークを持続的に推進するための体制づくりがある。コラボレーションを行うパートナーを探し協働していくことや、後継者の育成などが課題である。例えば、まちづくり団体やまち歩きガイドボランティアなどのキーパーソンとの連携についても今後検討していく予定である。

これまでの取り組みを紹介する。第一フェーズ（2000～2009年）は、まちの歴史と今の様相、まちづくりの現状について、調査・取材を行つたり、あるいは研究会を開催しながらとりまとめ、過去からの連続性を意識しながら、まちの魅力を抽出し、紹介してきた。

主なアウトプットとしては、単著では『大阪水の都に浮かぶ劇場』（創元社）、共著では、主催・事務局を担当した研究会の活動をとりまとめたものとして『大阪まち物語』、『大阪力事典』（いずれも創元社）がある。第二フェーズ（2010年以降）は、まち歩きブームが静かに到来してきた背景もふまえ、テーマを持ってまちを探索し、その内容を伝える、というコンセプトで新たに取材執筆を行つている。現在は、創元社のホームページ内のコラムに連載している。タイトルは、「カリスマ案内人と行く大阪まち歩き」で、2012年に1冊の単行本にまとめる計画である。

ホームページに掲載している内容（タイトル）は、次ページの通り。

- 第一回** 東横堀界隈——大阪最古の城下町で新旧の本物に出会う
- 第二回** 鎮魂のまち、法善寺界隈と寺町を歩く——オダサクの大坂発見
- 第三・四回** 近代建築のシルエットと「ティテール」——中之島・北船場を歩く
- 第五・六回** 旧市街地でまちの宝を探せ——堺の匠とカリスマを訪ね歩く
- 第七回** アートなミニマミを回遊する
- 第八回** 心斎橋筋界隈いまむかしアートなミニマミを回遊する
- 第九回** 道頓堀の銘板からウクレレまで
- 第十回** 自転車に乗って海をめざす——九条商店街をめぐり北港を経て天保山へ
- 第十五回** 繼承される信仰と情景、そして食べもん——住吉界隈で大阪人の原風景を味わう
- 第十一回** 信仰のまち上町台地時空散歩——落語家といく、上方芸能の舞台

(創元社 ホームページ <http://www.sogensha.co.jp/column/osakamachiaruki/>)

例えば、第七回・第八回の「アートなミニマミを回遊する」では、大阪大学総合学術博物館教授の橋爪節也先生を案内人として、従来のイメージと違う、歴史とアートが点在するエリアとしてのミニマミの歩き方を紹介している。

明治期に架けられていた石造の心斎橋が、現在の心斎橋筋、長堀交差点に残っていることを確認したり、あるいは、昭和初期のモダニズムの建築・美術を体現した大丸百貨店の建物内部のデザインや装飾を見たり、ミニマミの各所に、現代アートや近代建築、浮世絵などの貴重な作品を楽しめるスポットがあることを紹介している。さらに、案内人である橋爪さんが語った、まちへの思い。歴史がある場所だけに、情報センター・史料館がぜひ必要なこと、旧市街地区を都市の象徴として、文化的に保全しながら新しく發

展させるしつかりした施策がほしいこと。

大阪のイメージを文化芸術に支えられたものに変える、イメージ戦略が必要だという橋爪さんの強いメッセージを盛り込み、現状への課題や提案を行つた。



2000年～2009年までのアウトプット例（出版書籍）



創元社ホームページ内連載コラム  
「カリスマ案内人と行く大阪まち歩き」表紙

## 都市文化の再発見から、つながりによる活動拡充へ

これらの活動を含め、大阪を再発見する体験をした住民やまちづくり関係者の方からは、「はじめて知つて感激した」「より興味が増した」「面白い」「このまちが好きになつた」「も

